

5 幼稚園における道徳性の芽生えを培うための基本的な考え方

幼児期の道徳性の芽生えは、教師の働き掛けの有り様に極めて大きく左右される。

(1) 子どもを受け入れ、認める

安定感 肯定感

自分を受け入れ、自分らしさを大事にしつつ、その可能性を広げていく自分にも自信をもつ。これらの自己を発揮する過程が、その後の発達の基盤となる。まず、この時期を十分経るかどうか。そこに幼稚園の意義がある。

(2) 多様な人・生き物・ものと細やかにかかわる

道徳性の発達には、相手や状況に応じて、適切な振る舞い方を判断していくことでもある。

ものとのかかわりを通して、幼児は自分の力の発揮の仕方や手応えの感覚を変えていく。

人に対してかかわるときに、気持ちの触れ合いと交流を感じ取る。

生き物とのかかわりでは、命の大切さに対する感性のもとが生まれる。その感性が、人を大切に、人間関係を調整していく気持ちの芽生えとなっていく。

(3) 他者との交流・協力を大切にする

相手とのやり取りを通して、自他を生かしつつ、もっと大きなことを実現していくには、相手の言うことに注意を払い、また自分の思いを消すことなく、新たにそこで気付いたことを大事にして、他者との交流・協力を図っていく。そこで生まれた遊びのテーマややり方により、自分の思いを変え、自分の行動を合わせていく。

幼稚園の学級単位程度の活動も可能となる。大きな集団の活動は、教師の指導なしには難しい。一人一人の幼児の思いを生かしつつ、集団を意識した新たな方向を見出すことが大切である。

(4) 集団生活のルールやきまりの意味に繰り返し触れる

自己を抑制しつつ、周りを見回すことで、次第に、自分の思いを大切にしつつ、社会のルールを守ることが可能になる。

自他の思いをいかに生かすかの経験を、幼稚園の時期に繰り返しすることが大切である。